

居場所のアンダーグラウンド
“ドーリ” 大通交流拠点地下広場を対象とする
〈秩序〉と〈場所〉の研究

社会学部地域社会学科

21LC001 浅利拓誉

目次

1. 序論

- [1.1] 研究の背景
- [1.2] 研究の目的と対象
- [1.3] 研究の方法
- [1.4] 先行研究の動向と課題

2. 大通交流拠点地下広場の成り立ち

- [2.1] 大通交流拠点地下広場の形成
- [2.2] 今の広場とこれから

3. <秩序>：大通交流拠点地下広場の規律

- [3.1] 広場にはどういった人が存在し、どのような問題行為があったのか
- [3.2] 若者のグループ形成と秩序～フリーターSのグループに着目して
- [3.3] 若者のグループ同士の秩序
 - [3.3.1] ナタ事件前に秩序はあったのか
 - [3.3.2] 広場に集まる若者の服装
 - [3.3.3] 今の広場の若者の秩序
- [3.4] 無法地帯から安全な場所へ

4. <場所>：なぜ大通交流拠点地下広場に集まるのか

- [4.1] 何のために大通交流拠点地下広場に集まるのか
 - [4.1.1] ナタ事件が起きた直後に広場を訪れていた若者の目的
 - [4.1.2] 今、広場に訪れている若者の理由
- [4.2] なぜ“ドーリ”なのか
- [4.3] 若者にとっての“ドーリ”という通過儀礼

5. 結論

脚注・参考文献

1章 序章

[1.1] 研究の背景

“ドーリ”¹⁾、通称大通交流拠点地下広場は大通駅構内に位置する誰もが使うことのできる広場である。地下鉄大通駅は南北線、東方線、東西線の三線が唯一通る駅である。地下鉄大通駅の2022年の1日の平均乗車数は71,296人である（札幌都市交通データブックより）。毎日7万人を超える人が乗り降りする駅の南北線構内にあるのが大通交流拠点地下広場だ。2011年札幌駅と大通駅間の地下歩行空間が開通した。開通前より歩行者数が平日では3倍、休日では2倍になったことを受け、2015年にこの大通交流拠点地下広場は完成した。複数ある整備方針の中の一つが「方針2 滞留機能、利便機能を備え人々が豊かな時間を過ごすことのできる広場を形成する」というものであった。それゆえ市民やこの街への観光客が休憩、待ち合わせをすることができる空間が広がっており、その特質としては歩行者動線の支障にならない場所になっているため、結果として誰でも気楽に使うことのできる公共空間が形成されている。

この広場を利用する一部の人々によってこの場所は“ドーリ”と呼ばれる。この“ドーリ”という言葉に少なからず含まれるのはかつて多く見られた「迷惑行為」である。広場の休憩スペースにおいて若者が飲酒や喫煙を繰り返し、さらにはグループによる場所の占領、喧嘩などこういった迷惑行為が2022年末から2023年にかけて問題視されていた。しかし現在においては飲酒や喧嘩といった行為は鳴りを潜んでいるように思える。筆者が行った参与観察のフィールドノートを以下のように引用してみたい。

A騒ぐ-若者たちの使い方の事例から- 事例1 8月5日21:00頃

32名が広場に滞在している。10代と思われる私服を着た9人組(男4女5)が広場の中心にある立ちながら使えるテーブルの周りを囲んで、おしゃべりを楽しんで居る。21:20頃から男3人女2人が増え計14人の大人数で集まっている。人数が増えてから追いかけてっこをしたり傘でつつき合ったりなど危険な遊びをし始めた。危険なことをしているにも関わらず周りのスーツを着たサラリーマンや主婦世代の方々に変な目で見ることなくそれぞれ会話を楽しんでいたりと、スマホを見たりしている。この広場では若者が遊ぶことが常習化されているのではないかと。21:45 4名がポータルタウン方面へ。残りが南北線の改札を通る。22:00ごろになると中高生と見られる 人はいなくなる。

B時間潰し-若者たちの過ごし方の事例から- 事例2 8月12日21:00頃

26名が広場に滞在している。多くても3人のグループしかいない。基本1人でスマホを触っている人が多い。若者は女5人、男8人。21:30頃になると21:00から滞在していた若者は半数になった。3人の若者は友人が来たら広場を離れた。1人の若者は21:30ちょうどに立ち上がり南北線の改札を通った。21:00頃からの女性二人組も21:40頃に2人で札幌駅方面に歩き出した。この広場を会話やスマホを見る場所、集合時間までの待機場

所として使っている様子が見受けられた。

このように今現在は若者たちのじゃれあいのようなものは見られるものの、筆者が迷惑行為に遭遇することはなかった。ではなぜそのような行為が見られなくなったのだろうか。

例えば市川和子は「現代都市の公共広場には学校や家庭に居心地の良さを感じられない若者たちが集まる」と述べている（市川 2009：16）。札幌市の秋元克広市長は「いろいろな思いを持つ子どもたちがいて、最近はSNSなどでつながったりしていることがあるので、何らかの居場所や仲間のつながりということを求めているケースが多いのではないかと」（札幌市令和5年度第17回定例市長記者会見記録 2024/2/26より）」と話す。

また荻原健二郎は「公園は思春期年代同士、多世代・異年齢と共存する公益の場にもなっている」と述べている（荻原 2022：227）。「ドーリ」は公園ではなく公共空間であるが、多世代異年齢が広場にはいるため公園と似た公益場になっている側面もある。しかし大通は一般的に各々の「地元」から離れた場所であり、交通費もかかるここにわざわざ集まるのには何か特別な理由があるとも考えられる。

[1.2] 研究の目的と対象

本研究の目的は大通交流拠点地下広場に集まる若者はなぜ大通を、選び、何を目的に集まっているのかを明らかにすることである。対象は大通交流拠点地下広場であり、南はミスタードーナツから北は改札口までの広場を指す（図1参照）。調査対象は、この広場に集まる10代の人々とする。

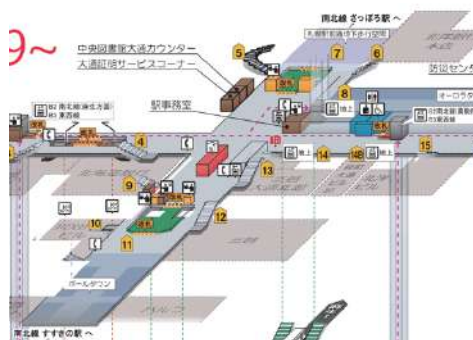


図1 大通駅構内図

[1.3] 研究の方法

本研究では参与観察、対象者へのインタビュー、広場を管理する札幌市交通局高速電車部運輸課へのインタビュー、そして対象者の行動観察を行う。参与観察は観察項目を広場利用者全員の数、性別、服装、手荷物の有無、姿勢などを記録している。筆者は21時から23時で30分ごとに広場の利用者の様子を記録した。広場に立ち止まらず通り過ぎる人は対象としていない。具体的にはミスタードーナツを開始地点とし時計回りに歩きながら記録を行った。実施日は8月5日、12日、9月3日、5日である。対象者へのインタビューは以下のように行った。実施したのは11月13日14日の18時から22時の間である。11歳から20歳の男女計9名にインタビューを実施した。複数で広場に滞在している若者に対面でボイスメモで録音をとりながら話を聞いた。

何を目的に大通地下交流広場にきているのか/どういったときに訪れるのか」「広場を利用する上で気をつけている事は」「広場はあなたにとってどんな場所なのか」という三つを

主な問いとして半構造化インタビューを実施した。対象者は以下の通りである。

	年齢	学年・職業	「地元」
高校1年生女性	15歳	全日制高校1年生	札幌市北区
高校2年生女性	16歳	全日制高校2年生	札幌市豊平区
小学5年生女性	11歳	小学校5年生	札幌市北区屯田
中学3年生女性	15歳	中学校3年生	不明
高校1年生男性	16歳	高校1年生	札幌市東区
高校1年生N	16歳	定時制高校1年生	札幌市南区
高校2年生S	17歳	定時制高校2年生	北広島市
フリーターS	18歳	居酒屋勤務	札幌市白石区
現場作業員T	20歳	現場作業勤務	北広島市

インタビューを行った際の流れは次の通りである。

13日21:00	広場に座って会話していた高校1、2年の女性2人にインタビュー
21:40	小学5年、中学3年女性が座り高校1年Nが立って話しているところにインタビュー
21:45	インタビュー中に3人と知り合いの高校1年の男性が通りかかり話を聞く
14日19:00	13日に話したNが1人で座っているのを見つけ話しかける。遊ぶ予定だった友達を連れてきてくれる
19:10	高校2年S合流
19:20	現場作業員T合流。ミスタードーナツを買い、食べながら話を聞く
19:40	フリーターS合流、4人の話を聞く

交通局職員へのインタビューは11月28日10時に行った。交通局のホームページから問い合わせ、インタビューの機会を設けていただいた。インタビューの内容としては広場ができた2015年から迷惑行為が起きる2022年まではどのように使われていたのかと広場の今後のありかたを主に聞いた。問題が起きていた時に交通局に所属していた職員は異動していたため過去の資料、データをもとに話を伺った。

対象者の行動観察は11月14日のインタビュー時に交流を持つことができたフリーターSに行った。実施概要としては11月28日の17時から22時過ぎまで行動を共にし、普段どのように遊んでいるのか調査を行った。当日の流れは下記の通りである。

17:00	大通りで集合、ポールタウンを歩きススキノ方面へ
17:05	AOAOの喫煙所で喫煙しながらどこへ行くか話す、喫煙所の開け方を教えてもらう

17:15	ガヤススキノ店到着、焼肉を食べながらSの生い立ちや最近の出来事を聞く
18:45	退店、宮越屋ススキノ店へ向かう
18:53	宮越屋到着、ドリンクを注文し広場の話をインタビューする スロットの話を教えてもらう
20:20	退店、狸小路2丁目ベガスベガスへ
20:25	ベガスベガス到着、2人で1000円46枚貸し出しを打つ 当たらず1000円176枚貸し出しへ、2人とも当たりまくる
21:30	退店、狸小路を歩く、狸小路4丁目タイトーステーションに行く
21:33	入店、パンチングマシン ²⁾ を2人でやる。筆者130キロS君320キロのスコアを出す
21:50	退店、大通りへ歩き広場に行く
22:00	広場にいとSの知り合い2人と出会い、談笑
22:10	解散

[1.4] 先行研究の動向と課題

本論に先行する研究として居場所や公園を対象としたものが挙げられる。例えば市川和子は、水戸駅を対象に都市の公共広場における日活動的なたむろする若者を含め、そこに集まる若者たちの空間行動を調査し、都市の公共広場がどのように若者の居場所として機能しているのかを明らかにした。彼女の研究によると、いわゆる水戸駅の「たむろ」の実態は、水戸駅は管理する主体の利用規制が弱いことから若者たちのたまり場になりやすいというものだった。そして空間の秩序という点においては、都市の公共広場に自然と形成された若者の居場所は、若者同士の能動的な働きかけより、むしろ空間を管理する主体（警察官）との関わり合いから、秩序が構築されていくということであった（市川 2009:23）。

また荻原健次郎は、思春期年代における公園との関わり方と公園の役割について提言している。思春期年代が放課後のwell-being（楽しさや幸福感）を感じるのは、友達との交流と外遊び環境の質量に大きくかかわっており、友達の家と共に公園・広場・空き地がそれらを満たす重要な役割を持っていることである（荻原 2022:226）。と述べており、学校外での幸福感には公園、広場、空き地が重要な役割があると論じている。つまり思春期年代である10代が学校外で幸福感を感じるのは公園などや広場で遊ぶ周南である。またそこで、思春期年代は自発的・自立的に様々な活動とさりげない体験や経験を重ね、心地よい緊張と緩みの中で多様な他者・自然との交流とコミュニケーションをとり、生の充実感を得たりしている（荻原 2022:227）。思春期年代では、こうした公園や広場での多様な他者との交流をすることが幸福感や楽しさを感じるのに必要だと述べている。

そして住田正樹の2003年の研究では子どもたちにとっての居場所とは何かを教育学、心理学、社会学など様々な視点からアプローチし、現実的様相を浮き彫りにすることを目的とした。住田によれば、「居場所」というのは、本来は、文字通り人の居所、人がいるところ

という一定の物理的空間を意味する。しかし近年の使われ方は、それに安心とか安らぎとかくつろぎ、あるいは他者の受容とか承認という意味合いが付与されて、自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地のよいところ、心が落ち着けるところ、そこに居るとホッと安心して居られるところというような意味に用いられるようになってきた（住田 2003:3）。そのうえで、住田は子どもの不登校問題以降、居場所という言葉の使われ方が変わってきたと論じている。

子どもの居場所の構成条件を、住田は二つ挙げている。それは子ども自身がその場を居場所だと実感できる主体的条件と、客観的条件の二つである。客観的条件には関係性と空間性という二つの軸がある。住田は多様な他者に肯定的に評価されるほどに自己概念は安定するのである。多くの他者に受容され、承認され、肯定されているのだという確証が自己に自信と安定をもたらすのである（住田 2003:8）。多様な他者に肯定的に評価されることで安定すると結論づけている。

こうした郊外、公園、居場所の研究では宮台真司によるそれが有名である。宮台は若者の居場所について次のように述べる

かつて街は「盛り場」というくらいで、ハイテンション（アップー）な非日常だった。周りは伝統的な地域社会で、「街に出れば盛り上がるぜ」とばかりに繰り出してハメを外した。ところが今の子供達にとって、街はむしろローテンション（ダウンナー）な日常だ。むしろ家・学校・地域の方が「いい子ちゃん」を役割演技する相対的にハイテンションな場所である。だから街でこそラクになれる。そうやって街を『まったり』と生きる連中が、昨今の「街にたむろする若者たち」なのだ。（宮台 1997:146）

1970年代後半、家族に学校的評価原則が持ち込まれたことから、その場から逃れるために、若者たちが都市の公共広場に集まっていると宮台は論じている。

さて本研究と既往研究との第一の差異は「参与」のスタイルにある。[1.3]で論じた通り若者の居場所つまり大通交流拠点地下広場に入り込み若者と関わることによって研究している。より重要な点として公園やたまり場におけるアクターは若者のみではないということにある。昨今の問題として取り上げられている「引退世代」も大通交流拠点地下広場には存在している。そのためたむろするのは若者のみではなく高齢者やその場所性を含めて議論していく必要がある。さらには市川が都市の公共広場に集まる若者の心理は、多くの論者が説明している。しかしながら、実際の調査をもとに、都市の公共広場が若者の広場としてどのように機能しているかを明らかにした報告は少ない。（市川 2009:26）と述べているようにたまり場がどう役割を果たしているかを明らかにしている研究が少ない。そのため本研究では広場がいかにして若者に作用しているかにも焦点をあて、議論していく。

2章 大通交流拠点地下広場の成り立ち

2章では正式名称は「大通交流拠点地下広場」、若者が呼ぶ“ドーリ”の成り立ちについて明らかにする。[2.1]では、広場が作られてから、人々にどのように活用され、どういったことが起きてきたのか、広場がどう変化を遂げてきたのかを明らかにする。[2.2]では、事件や問題行為が多発し、連日新聞やニュースで報道されていたが、今現在の広場はどうなっているのかについて議論する。

[2.1] 大通交流拠点地下広場の形成

先述のように、2011年3月に札幌駅前通りの地下歩行空間が開通したことにより、歩行者通行量が増えていた。大通交流拠点地下広場整備基本計画によると、札幌駅前通（地下部および地下歩行空間）の歩行者通行量は札幌駅前通の地下歩行空間の開通前と比べ約2倍（休日）から約3倍（平日）に大幅増加。地下鉄大通駅南北線においても同様に約2倍（駅南側）から約3倍（駅北側）と歩行者量が増加していた。そのため、「市民や札幌への来訪者が休憩、待ち合わせ、多様な情報の収集などを行うことができる対流空間の確保」を目的として地下鉄南北線大通駅コンコースに大通交流拠点地下広場の整備計画が立てられた。

2015年2月大通交流拠点地下広場が完成し、椅子やテーブルの設置された休憩スペースができた。交通局職員へのインタビューによると、「完成した後、2015年から迷惑行為が頻発するようになる2022年末まで、大きな問題は起きていなかった。ホームレスと見られるような人たちは広場で日中寝ていたりしたが、終業時間になると帰っていった」と答えた。2015年から2022年までは広場の安定期であったと推測される。

では2020年に始まったコロナ禍での広場の利用はいかなるものであったのだろうか。コロナ禍は飲食店など各所が休業、もしくは時短営業を強いられていたなか広場は閉鎖されていなかった。広場の利用について北海道新聞は当時次のように報じている。

4月21日午前9時 札幌地下街ポールタウンとオーロラタウンは臨時休業中。広場にはすでに15人ほどが腰掛けていた。豊平区に住む和田猛さん（75）は歯科医院に行く途中、広場で一休み。普段は地下のカフェを利用するが「どこもかしこも閉まっていたねえ。初めてここを使うんだよ」

正午 財布だけを持ち、ランチに繰り出す人たちが目立ち始め、広場を通る人の流れが次第に増す。周辺の数少ない営業店舗の一つであるドーナツショップには間隔を置いて列ができた。近くの立ち食いそば店のカウンターもいっぱいだ。

午後1時 広場の利用もピークを迎え、25人ほどが昼休みを過ごしている。テーブルはほぼ満席。椅子のないカウンター席で、立ったまま弁当を広げていた会社員の40代男性がいた。時差出勤が導入され、昼休みも1時間遅れという。周辺の飲食店も休業となり、「しばらくは弁当の生活が続きそう」と苦笑いした。その後、しばらくして中央区

の男性会社員（61）が、テーブル席で弁当を食べ始めた。職場はコールセンター。「人が大勢いる職場で昼飯を食べるより、こっちの方が安全だと思ってさ」。おにぎりや卵焼きを次々とたいらげていった。

午後8時 夕方から始まった帰宅ラッシュが続いている。「プシュ」。北区のクリーニング工場での勤務を終えた男性（41）がテーブル席に座り、缶酎ハイを開けた。普段はあまり飲酒しないが、「たまたま飲みたくなった」という。（「北海道新聞」 2020.4.24 朝刊）

しかし2022年12月頃、南側の休憩スペースで若者と中高年が酒を飲み、騒ぐようになる。机やベンチで中高年のグループ2、3人が酒盛りを始め、周囲にいた若者にも声をかけ、一緒に酒を飲んだり、騒いだりするようになった。中高年のグループは毎日来ては、酒盛りし騒いでいたため駅員が度々注意をするも、酒盛りを継続していた。この頃から南側だけでなく広場全体で若者たちはたむろするようになり、飲酒、喫煙、他の利用者の迷惑になるような騒ぎを見せていた。

2023年4月、南側の休憩スペースの椅子とテーブルが閉鎖される。中高年、若者グループの飲酒などの迷惑行為が収まらなかったため、テーブルと椅子を閉鎖し利用できないようにした。

ここで交通局職員のインタビューをもとに実際に広場で迷惑行為が起きた時の対処について議論したい。迷惑行為が起きた際まず駅員が注意をしに行きやめるよう促すが、反発される場合は警察に通報する。大通交番から警察官が来て口頭で迷惑行為を行う人々を注意する。しかしお酒を飲んで騒いでいるだけでは犯罪とはみなせないため警察官は連行することはできない。駅員に対して反発する人が多かったため、強制的な連行はできないが警察に来てもらいその場を鎮めるといった対処をしていた。

2023年4月24日広場でナタを振り回した男が逮捕される。実際の北海道新聞の記事はこの事実を次のように報じた。

午後6時35分ごろ、札幌市中央区大通西3の札幌市営地下鉄大通駅講内で、男が刃物を持って暴れていると通行人から110番があった。現場に駆けつけた中央署員が男を取り押さえ、銃刀法違反（所持）の疑いで、現行犯逮捕した。石川容疑者は酒に酔った状態で酒瓶を床にたたきつけ、付近にたむろする若者らを威嚇し、「たまってんじゃねえよ」などと叫びながらナタを振り回したという。複数の目撃者によると、逮捕された男は走って現れ、現場でナタを振り回しながらそう叫んだ。通行人が一斉に避難する中、駅事務室の職員らが説得に当たったが、男は興奮した様子でテーブルに置かれていた荷物やペットボトルを次々と蹴り上げた。駆けつけた警察官が取り押さえるまでの数分間、男は怒鳴り声を上げ、自らが飲んでいた酒瓶も床にたたきつけて割った。トラブルの原因となったのは、現場で男と口論していた札幌市内の男性（16）ら複数の若者に

よると、逮捕された男は事件前、休憩スペースでたむろしているグループの様子を交流サイト（SNS）に投稿し、トラブルになっていた。（『北海道新聞』 2023.4.25朝刊）

飲酒していた容疑者が、若者が広場にたむろしている様子をSNSにあげたことによりトラブルになり、口論からエスカレートし暴走してしまうという事件が起きた。

2024年4月28日からこのナタ事件を受け飲酒禁止と広場に警備員が配置される。広場を管理する交通局はこれまで飲酒を禁止にしていなかったが、当事件や迷惑行為には飲酒が影響したとして広場全体で禁止を決めた。警備員は民間警備会社に依頼し、土日含め利用者が増える午後3時から終業時間まで2人体制で警戒にあたった。また禁止事項として「飲酒」に加え、「喫煙」「大声をあげ。騒ぐ」を明示したポスターも張り出した（写真1）。北海道新聞は「市交通局は違反や迷惑行為があった場合は積極的に声をかけ、警察との連携も強化する姿勢で、毅然とした対応をとると話している（『北海道新聞』 2023. 4. 28朝刊）。」と報じた。広場の利用方法に規制がかかり、今までよりも迷惑行為をするものに対しては厳しい対応、注意をするようになった。しかし広場がすぐに落ち着きを取り戻すことはなかった。警備員、駅員と飲酒をやめない若者の攻防がまだ続く。北海道新聞は、次のようにその様子を伝えている。



写真1 禁止事項が書かれたポスター

「酒を飲んでるよ」「ここはうちの場所。飲酒はやめない」。28日、昼間から、若者ら4、5人が、広場内のベンチに座り込み、透明のカップに注いだビールや酎ハイとみられる飲料を次々と飲み干した。市が同日から配置した警備員2人が、若者たちを遠巻きに見つめるが、声はかけづらそうだ。警備員は「本人たちは酒と言っているが、見ただけでは、酒と断定できない」と漏らした。

若者たちは、職員がポスターを張るのを横目に見ながら、酒とみられる飲料を飲み、広場を歩き回った。取材のため、撮影している報道陣のカメラも気にしない様子だった。

（『北海道新聞』 2023.5.22朝刊）

飲酒禁止、警備員を配置しても若者の迷惑行為はおさまらなかった。当時の交通局加藤正美運輸課長は「警備員に隠れて酒を飲む人は依然としている。どうやって駅構内の秩序を守っていくか、頭を悩ませている」と語り、広場を管理する交通局は迷惑行為をやめない若者にとっても困っていた（『北海道新聞』 2023. 5. 22朝刊）。また飲酒禁止を受け、利用者からは規制を歓迎する声と望まない声があがった。歓迎の声は「買い物帰りに広場でよく休憩

するという東区の主婦（38）は最近酒に酔った人が増え、怖かった。飲酒禁止になりほっとした」（『北海道新聞』 2023. 4. 29朝刊）であり、広場付近を安心して通行できるというものだ。一方、「若者グループと親交のある男性（71）はこのスペースは行き場のない若者の居場所にもなっている。規制せずに運営する方法を考えてほしい」（『北海道新聞』 2023. 4. 29朝刊）と規制を望まない声もあった。

2023年6月より札幌市が大通交流拠点地下広場での若者の相談にのる事業を開始する。家庭の事情などから「居場所」を求めて広場に集まる10代を支援する狙いだったが、一週間で聞けた件数は2件であった。気温が高くなり、若者たちが集まる場所を変えていることも背景にあった。実際に6月に入ってから飲酒や大声で騒ぐなどの迷惑行為は減少傾向で、規制を始めた4月28日ごろまでは迷惑行為の報告件数が1日あたり平均3件あったが、6月以降は1日あたり1件もない日もあり、警察への通報もゼロであった。市交通局は「6月に入り、若者の迷惑行為はめっきり減った」と説明した（『北海道新聞』 2023. 6. 9朝刊）。

2023年6月27日、札幌市は、閉鎖中だった休憩スペース南側の全ての椅子とテーブルを撤去すると発表した。一方、「ナタ事件」により修繕をするため一部を閉鎖している北側のベンチなどの利用は27日から全面再開することになる。こうして今現在の広場の配置になった。警備員の配置はこの時点では継続されていた。

2023年7月31日、迷惑行為が大幅に減ったため、警備員の配置を終了した。駅員が迷惑行為を注意した回数は4月が59件、7月月は25日時点で14件。7月の迷惑行為の大半は飲酒禁止の注意書きに気づかず飲酒したケースであった。また警察へ通報した事案は4月は13件だったが、7月は0件だった。「飲酒、喫煙、大声で騒ぐ行為の禁止」のポスターは今もなお掲示されている。

[2.2] 現在の広場とこれから

2025年現在の広場では、構内禁止事項として掲げられた「飲酒、喫煙、大声で騒ぐ」のような迷惑行為は見られることは通例ない。若者がいなくなったわけではなく、参与観察時には制服を着た高校生も多くいた。しかし事件前後のように複数の若者グループが大人数でたむろしている様子はみられなかった。仕事終わりの会社員が休憩していたり、主婦世代の方々が数人で話していたり、待ち合わせの場所としても使われているのを観察することができた。外国籍らしき人は、楽しそうに日本語を教え合っていた。

このような今の広場の使い方について、交通局職員は、「様々な年代、多様な使い方をしているためいい方向になっている。南側の椅子テーブルを撤去したことにより街に訪れる人の休憩スペースを無くしてしまったが、今は迷惑行為がなく利用者が使いやすい広場になっているため結果撤去してよかった」と語る。完成当時とは南側のスペースは変わったが迷惑行為もなくなり落ち着いた当初の目的を果たしている広場になった。

これからの広場として交通局は、「南側のスペースに椅子テーブルを戻すことは考えていない。落ち着いた空間になったが冬になり気温が下がると若者たちは地下に降りてくるた

めその都度その都度何かあれば対応して行く」と話し、事件前後の広場には戻さないという意思を感じた。大通駅では迷惑行為が起きた時に対応するために駅構内の巡回の強化を継続している。

3章 <秩序>：大通地下交流広場の規律

3章では大通交流拠点地下広場の秩序について論じる。大通交流拠点地下広場は公共の場であるためルールというものを強制するのは難しい。利用者一人一人がマナーを考え利用することが求められるが、前章でみたように2022年末頃から2023年夏頃までは迷惑行為が多見され一般の人が広場を利用し難い状況になっていた。けれども、もとより広場に秩序はあるのだろうか。そしてその秩序はいかにして出来上がっているのか。まず[3.1]では広場にはどういった人たちが滞留し、どのような問題行為があったのかを論じる。広場が迷惑行為で溢れかえっていた時期における、利用者の属性やその行動の特質を明らかにする。[3.2]では、インタビューを実施することのできた若者グループに着目し、たむろをするグループ内の秩序を論じる。グループの形成過程、グループ内でのルールを明らかにしていく。[3.3]では相互の若者グループ同士での秩序のあり方を述べる。事件前後の広場には多くの若者グループが毎日存在していた。そのグループ同士にはいかなる秩序があり、対立、共存していたのかをインタビューをもとに考える。[3.4]では多くの若者が日々たむろし、利用し難い場所になっていたところからいかにいまの「安全」な広場になったかを議論する。

[3.1] 広場にはどういった人が存在し、どのような問題行為があったのか

ここでは2023年春に起きたナタ事件前後の広場が荒れていた時の利用者と問題行為を明らかにする。利用者であるSと広場を管理する交通局運輸課に行なったインタビューをもとに整理していく。当時の広場には大きくわけて四つの立場に分けられる。それらは[A]酒盛りを広場で始めた中高年グループ、[B]酒盛りグループと仲良くしていた若者、[C]それ以外の広場にたむろしていた若者グループ、[D]休憩スペースとして利用する人々の四つである。ではそれぞれはどのように広場を利用し、いかなる問題がそこにあったのだろうか。

[A]酒盛りを広場で始めた中高年グループ

この中高年グループは、広場で長時間にわたり休憩スペースを占領し、酒盛りを行っていたという。毎日2~3人でテーブル付きの南側の休憩スペースを使い、持ち込んだ酒、食べ物を広げ騒いでいた。この行為が見られるようになったのは2022年末頃で、中高年グループの面々は札幌市各地に住んでおり、広場には地下鉄を使って集まっていた。最初は中高年だけで集まっていたが徐々に近くの若者に声をかけ、お酒を飲ませ大人数で酒盛りをするようになっていった。広場を管理する交通局員はこの中高年グループについて「結構めんどくさい、一筋縄ではいかない、注意してもはいわかりましたと止めるような人たちではなかった(11月28日交通局インタビュー)」と話しており、手を焼いていた様子が窺える。酒盛りを行うたびに駅員が注意をしにいくが、お酒も入っているため暴言を吐き、注意を聞くことはなかったという。毎回口論になることで駅員の駅業務に支障を出していた。

このグループのなかでもとりわけ目立っていたのが当時71歳の“リーダー格”の男性である。若者に声をかけ一緒に酒盛りすることで彼らと交流することを楽しみに訪れていたようであった。このグループは駅員からは、「若者を悪い方向に煽動してしまっている」ように映っており若者に決して良い影響は与えていなかった。テーブル付きの椅子があった南側休憩スペースが撤去された後、中高年グループは徐々に広場には来なくなったという(11月28日交通局インタビュー)。

[B]酒盛りグループと仲良くしていた若者たち

中高年グループと仲良くしていた若者たちは前述したように、中高年グループと共に飲酒をして共に騒いでいた。駅員からの注意には中高年と反抗していた。この若者たちは他の若者グループからは「変な目」で見られていた。インフォーマントの1人であるSは「ジジイたちと何で仲良くするの？きもちわりい。」と、思っていたという(11月28日Sインタビュー)。

[C]迷惑行為をしていた若者グループ

若者グループはそれぞれ札幌市内、近郊様々な場所から広場に訪れていた。遠いところでは岩見沢市から来ていた者もいた。若者たちは夕方かけ広場に集まり、終電間際まで残るというわけではなく23時前にはいなくなっていたという。若者がいなくなった後は広場はゴミの山だった(11月28日交通局インタビュー)。毎日たくさんのグループが集まるため広場で衝突し、喧嘩に発展することもある。他には滞留しているなかで広場と大通公園をつなぐエレベーター付近での喫煙、大声で騒ぐなどの問題行為が日々行われていた。駅員が注意するとその場からいなくなるが、またすぐに広場に戻るといったイタチごっこが繰り返されていた。2023年4月にナタ事件を受け警備員を配置され徐々に広場から若者たちは姿を消していった。

[D]休憩スペースとして広場を利用する人々

街に訪れた際に休憩目的で広場を利用していた人々からは、「若者をたむろさせないでくれ」「警察と連携してたむろする若者を排除してくれ」「広場の周りが通りづらい」『11月28日交通局インタビュー』といった声をあげていた。開設当初のような広場を求める一般利用者が交通局に意見を出していた。

当時の広場を交通局の職員は「異様な空間だった」と話す。筆者もこの時期広場付近を通る、利用することがあったが、若者からお金をせびられた経験があり滞在することが難しいと感じていた。一般利用者からの声でわかるように中高年グループが酒盛り、若者がたむろすることによって広場の周りを通ることさえも怖く、広場を休憩スペースとして利用し難くなっていた。広場開設当初の誰もが利用できる広場とは変わり、荒れた空間になっていた。

[3.2] 若者のグループ形成と〈秩序〉～フリーターSのグループに着目して

本節では広場にたむろしていたグループがいかに作られたのか、グループ内の秩序はどういったものだったのかを明らかにしていく。[3.1]で述べた[A][B][C][D]に接触を試みたが、主に[C]の面々に話を聞くことができた。彼らからの聞き取り結果をもとに、以下にて論じていきたい。

[3.2.1] 若者グループの形成

Sは地元の友達と札幌駅南口広場でスケートボードをしたのがグループ結成のきっかけだと話す。最初は地元で滑っていたが「人に見られたい」という思いゆえ、札幌駅南口広場に訪れるようになる。そこでSは地元の友達とスケートボードをしている際に、同じようにスケートボードをしている年代と会話することで交流を持つこととなる。話しかけることで違う地域に住むスケートボードをする仲間が1人2人と増えていった。この仲間が後に広場で「たむろ」するグループとなる。話しかける内容はスケートボードのことから話をし、徐々に話題を広げていった。

彼らは札幌駅前でスケートボードしていたが今から2年前に札幌駅前の再開発に伴う警備の強化により大通公園へ場所を移す。大通公園に移ったことで公園でスケートボードをして疲れると地下の広場で休むという流れができる。こうして広場に「たむろ」するようになった。スケートボードをしない時でも仲間と広場に集まるようになった。

[3.2.2] 集まり方

このグループの集まり方に一つの特徴がある。街に訪れているグループの誰かが何を目的とするわけではなく、インスタグラムのストーリー機能³⁾を使い街にいる人を探し、連絡を取る。または位置情報交換アプリを使い友達の位置情報を見て、近くにいる友達に連絡をとり、いまから集まろうと声をかける。Sのグループやインタビューを実施した時にインスタグラムを交換した若者たちも、現在も同じようにインスタグラムのストーリー機能を使って声をかけていた。

ここで実際にどのようにインスタグラムの機能を使っているのかを紹介したい。インスタグラムのストーリー機能で二択の質問を出す(写真2参照)。街にいる、いない。この二択の質問を押すのはストーリーを見ている側の自由であり、「い

る」に押した者に話しかけ集合する。広場にたむろする若者たちの中の一部には前々から予定を立てるのではなく「その日のノリ」で集まることが明らかとなった。



写真2 実際のストーリー

[3.2.3] グループ内の秩序

次はグループ内のルール、秩序について概説する。SによるとSのグループにはこれといったものはなかったという。ただし男としてダサイやつはダメであった。では男としてダサイやつとはどういった人をさすのだろうか。「どんな時であっても女の子に手をあげることはダサイ」「グループ内でグループ内のやつのがいないときにそいつの陰口を言うこともダサイ」とSは話す。必ず守らなければいけないものはないが「男としてダサイことはしない」というのが鉄則だったようだ。ではダサイことをしてしまったやつはどうなるのか。「グループ内でボコボコにされる。」ボコボコ、というのももちろん罵声を浴びせるのではなく殴る蹴るといった暴力行為を行う。「ボコボコ」にされたやつはそのまま街に集まることはなくフェードアウトしていくパターンと、乗り越えて強い男になるパターンがあるとSは話した。乗り越えたやつはグループ内から見直され、認められる。こうしてグループとして強い繋がりになっていく。

ではグループ内に上下関係はあるのだろうか。Sのグループでは同世代の人が集まっており年齢が一、二歳しかかわらないため年功序列の上下関係というものはなかった。だからと言ってみんな同じ立場というわけでもない。グループ内では“力”で上下が決まっていた。ススキノのラウンドワンや狸小路のタイトーステーション⁴⁾にあるパンチングマシンでそれぞれのパンチの重さを計測。パンチが重いメンバーほど上で弱い者は下と決まっていた。

[3.3] 若者グループ同士の秩序

本節では広場でのグループ同士のルール、対立関係などを論じていく。前述している通り、広場には日々若者グループが集まり迷惑行為が行われていた。その迷惑行為の一つに若者同士の喧嘩もあった。その「喧嘩」の起因やその後の上下関係について議論していく。

[3.3.1] ナタ事件前に秩序はあったのか

2022年末から2023年4月に「ナタ事件」が起きるまでの広場には、毎日複数のグループが集まっていた。この頃、グループ同士の喧嘩がよく起きていた。Sのグループでは、他のたむろしているグループが大声で騒いでいたり、屋内で喫煙しているのを見たら「調子に乗っている」と判別し「上に来い」と大通公園に連れて行き殴り合いの喧嘩をする。大通公園に存在するトイレの裏、人目のつかないところを選んで喧嘩していた。

興味深いのはこの殴り合いの結果によって広場でのグループの上下関係が決まっていたという事実である。負けたグループは負けた相手が広場にいる時は大人しくするようになっていた(11月28日Sインタビュー)。つまり広場内では喧嘩の強さで秩序が形成されていたという。

[3.3.2] 広場に集まる若者の服装

広場の若者の服装について述べる。そこに集まるのは10代の若者であるにも関わらず、

彼らの多くはブランド品を身につけている。NIKIのスニーカーであったり、Louis Vuittonのカバンなど、お小遣いで買うには困難なファッションを身につけている者も多くいる。それはなぜだろうか。その目的は「広場に集まる他のグループ、若者に舐められないため」だという(11月28日Sインタビュー)。COACHのカバンやPUMAのピチピチのスウェットなど、ブランドによっては舐められてしまうこともある。知らない相手がたくさんいる広場だからこそ相手に舐められないためいいものを身につけるのが広場で生きていくための術であった。しかしアルバイトもできない中学生はどうやってそうしたブランド品を手に入れているのか。Sによると「親に買ってもらうかドンキホーテで盗むか」の二択だという。

[3.3.3] 今の広場の若者の秩序

現在の広場は事件前後ほど若者がたむろするといった場所ではなくなっている。今、この場所に足を運ぶ若者たちにも<秩序>はあるのだろうか。インタビューを通して共通していたのは「周りの人と関わらない」ことであった。多世代、色々な人が利用するようになったが、若者が多く滞在する時間帯もある。そのときに他のグループとか関わってしまうとケンカになってしまいかねないのだ。広場の使い方について女子高生は「他のグループ、人と関わらず気にしないようにしている」と話す(11月13日女子高生二人組インタビュー)。男性4人は過去に他のグループと仲良くなり過ぎ、相手グループの彼女に冗談を言ったところ喧嘩になってしまった経験があり、いまは「距離感を保つようにしている」と話した。(11月14日男4人インタビュー) このように今の広場では利用者同士で問題を起こさないように気を遣いながら広場を利用していることがわかる。

[3.4] 無法地帯から安全な場所へ

前述しているように広場で起きた「ナタ事件」の前後では飲酒、喫煙、大声で騒ぎたむろしている若者がいた。中高年はグループになりテーブルを囲い長時間に渡り酒盛りをしていた。

ではこのような状態になった広場を“普通”に利用する人はどう思っていたのだろうか。

事件前は広場での飲酒が規制されていなかったため飲酒は問題行為でなかった。しかし買い物帰りに広場でよく休憩するという東区の主婦(38)は「最近酒に酔った人が増え、怖かった。飲酒禁止になりほっとした」と答えている(『北海道新聞』2023.4.29朝刊)。酒に酔った人が広場にいた状態では怖いと感じる人もいたのだ。交通局へのインタビューでも、広場でたむろするものに対しての対応を求める声が多かったと述べていた。広場での若者の迷惑行為や中高年の飲酒は一般利用者からは排除してほしい存在だったことがわかる。ではいかにして広場から若者と中高年を排除したのだろうか。

広場を管理する交通局は事件が起きるまで飲酒を禁止にしていなかったが、男が暴れた事件や迷惑行為は飲酒が影響したとして、禁止を決めた(『北海道新聞』2023.4.28朝刊)。飲酒禁止と同時期に警備員2名も配置され広場の安静化に努めた。しかしこの二つを実施

したがすぐにはおさまらず、当時の交通局加藤正美運輸課長は「警備員に隠れて酒を飲む人は依然としている。どうやって駅構内の秩序を守っていくか、頭を悩ませている」（『北海道新聞』 2023.5.22 朝刊）と話していた。

飲酒禁止になってから 1 ヶ月半ほど経つと、飲酒を禁止にしたことにより酒盛りをする中高年が徐々に広場に訪れなくなった（11月28日交通局インタビュー）。若者のたむろはどうやっておさまったのだろうか。それは警備員、駅員の地道な声掛けだった。11歳と15歳の女性二人組は警備員が配置されたことによって、滞在しているだけで声をかけられることもあり、広場でできた友人はススキノに飲みに行くようになってしまい今の広場は人がいなくて楽しくないと話した（11月13日女性2人インタビュー）。「女子中学生は、以前は大通駅の地下広場に集まっていたが警備員に注意されるから、今はススキノや札幌駅に集まっていると明かした。」『北海道新聞』 2023.6.9 朝刊）このように広場でたむろしていた若者たちは警備員、駅員に声をかけられることで滞留し難くなり広場に訪れる回数が減ることになった。そもそも若者がたくさん集まらなくなったことにより若者同士の喧嘩やトラブルが起きなくなっていた。こうして広場から迷惑行為をする若者と酒盛りをする中高年が消え、今現在は皆が利用しやすい広場となっている。

市川は、「都市の公共広場に自然と形成された若者の居場所は、若者同士の能動的な働きかけより、むしろ、後述するような空間を管理する主体（警察官）との関わり合いから、秩序が構築されていくのである（市川 2009:23）。」と述べていた。大通地下交流広場でも、広場全体の秩序は若者同士ではなく、管理する主体（大通では交通局、警備員、警察）と若者や中高年との関わり合いによって秩序が構築されたのだ。

4章 <場所>：なぜ大通交流拠点地下広場に集まるのか

4章ではなぜ大通交流拠点地下広場を選ぶのかについて考えてみたい。札幌駅からすすきのまでの区域には多くの広場が存在する。であるのにも関わらず、若者たちが大通交流拠点地下広場を選んで集まるのには何か特別な理由があるのではないか。そして広場に集まることで何を得られるのだろうか、この二つの問いに照準を合わせ、本章の議論を行いたい。まず[4.1]では広場に訪れる目的を明らかにする。わざわざ自分の地元から交通費がかかる街に出てきてまで広場を訪れる理由はあるのか。そして[4.2]では街に多くある広場の中から何を理由に大通交流拠点地下広場を選ぶのかを論じる。なにか若者たちにとって惹かれるものがあるから大通交流拠点地下広場を選ぶのだと考えられる。しかし友達と集まることのみが目的なら違う広場でもいいのではないだろうか。最後に[4.3]では多くの若者が集まる広場だがそこは若者たちに何をもたらしているのかを明らかにする。若者たちが足繁く通う広場は若者たちにとっていかなる対象となっているのかを議論する。

[4.1] 何のために大通地下交流広場にきているのか

[4.1.1] ナタ事件が起きた直後に広場を訪れていた若者の目的

事件直後の当時一番若者がたむろし問題行為が頻発していた時期に広場を訪れていたものたちの「目的」を明らかにする。ここでは当時の北海道新聞の記事を資料として話を進める。当時の若者たちが広場を訪れる目的は、報道やインタビューのなかで三点ほど挙げられた。一つ目が自分の居場所を求めてであり、二つ目が広場でできた友達と触れ合うために、三つ目がアピアドーム⁵⁾閉鎖を受けたむろできる場所を変えたことである。

一つ目の「自分の居場所を求めて」とはどのようなものを指すだろうか。広場に集まる若者たちの中には家庭環境が複雑で自分の家に居づらいという者もいる。自分の家であるのに家庭環境が複雑であるために家に自分の居場所を見つけられない。そこで自分の居場所を求めて街の広場に訪れる。

ではなぜ街の広場に居場所を求めるのか。それは広場には同じような境遇の子が多く居心地の良さを感じるためだ。次のような例がある。親が離婚し住まいを転々、当時は母親の恋人の家に居候している女子中学生が広場にいた。その子は広場のベンチに座り「今日は『たまり場』来ないの？」とSNSで友人にメッセージを送った。なぜ訪れるのかというインタビューには「家に居づらいからここに来る。『たまり場』の友達は同じような境遇の子も多く、居心地がいい」と答えていた。「自分の家では感じられない居心地の良さ」が“ドーリ”にはあった（『北海道新聞』2023.5.22朝刊）。若者がたむろするようになった一つの要因としては、広場が今までなかった居場所になったということとその居心地の良さだった。

第二の目的が、“ドーリ”の友人とのフレンドシップである。しかしそれは地元の友達と

広場に訪れることとは異なるものだろう。小学校時代から人間関係に悩み、通っていた定時制高校も辞めた、ほぼ毎日“ドーリ”で過ごすという札幌市の少年（17）は、広場にいる理由をこう話す。「広場はだれでも、何でも受け入れてくれる。話を聞いてもらって、満足して帰る。あそこでできた友達もたくさんいる。」街をふらつくうちに、自分のように居場所を探す仲間に“ドーリ”で出会った。喫煙したり、酒を飲んだりしながら話し、自宅に帰るのは翌朝という日々を繰り返す。親から暴力を受けるので、家庭内でほとんど会話は無い。「家にいると、より寂しい。人と触れ合うために広場にいる」と話した（『北海道新聞』2023.5.22朝刊）。

人間関係に悩み自分の通っている学校では友達ができない子も“ドーリ”に行くと、同じような悩みを持った子と出会うことができ、居心地の良い仲間になっていく。広場には札幌市内外からたくさんの若者が集まっていたため地元が違う人々と触れ合える場であった。そのため悩んでいる人間関係を持ち込まないで過ごせるコミュニティであった。広場は家や学校よりも安心感を得ることができ、たむろする若者にとって居心地の良い居場所となっていた。

第三の理由が、アピアドームの閉鎖である。これは2021年12月より札幌駅南口にあるアピアドームが若者のたむろなど迷惑行為を受け閉鎖されたため、同じような環境の集まれる広場を求めて大通交流拠点地下広場に若者が流れてきたということを目指す。インフォーマントも札幌駅付近の再開発を受け札幌駅側に集まっていた子達が来ているようにも見えると話していた（11月28日交通局インタビュー）。女子高校生（16）はコロナ禍で休校が相次いだころ、札幌駅南口のガラス張りのドーム「アピアドーム」付近にたむろしていた。だが、迷惑行為が原因で、ドームは2021年12月から夕方以降は閉鎖されるようになった。事件があったことから、大通駅の地下広場には行かないよう親には言われているが、今も通う。「大人たちは私たちのことを『悪者』って目でしか見ていない。安心できる場所を求めているだけなのに」と話す（『北海道新聞』2023.5.22朝刊）。

以上をまとめると、広場に訪れる若者たちは家庭、学校に何らかの理由があり居場所がない。そのため自分のことを話すことのできる相手がい無い。また話し相手はどこにもいないため孤独感が強まってしまふ。そこで居場所を求めて広場に訪れ、同じような悩みを抱えた若者と話すことで友達になる。自分の話をするのができ安心できる居場所になっていたため“ドーリ”は若者がたむろするたまり場となっていた。

[4.1.2] 今、広場に訪れている若者の理由

本項では今、広場に集まっている若者たちの理由と目的を明らかにしていく。高校一二年生の女性二人組は集合スポット、おしゃべりの場として広場を利用している。“ドーリ”には遊びに行く前の集合スポットにして遊んだ後、解散前に広場のベンチに座り友達と30分から1時間ほど喋るといふ。広場を活用する理由として挙げられたのは、座る場所もありお金がかからないため気軽に行きやすいからということだ。そしてもう一つは学校と家の間

にあり定期で行けるため交通費もかからないからであった（11月13日女子高生2人インタビュー）。高校生年代では学校に行くための定期を持っており、かつ滞在するのにお金がかからない広場は友達と過ごすのに適しているのだ。小学5年生、中学3年生の女性二人組は、「地元の友達は面白くないから、ここ（大通交流拠点地下広場）でできた友達に会いに来ている」と話した。この2人は事件が起きる前から“ドーリ”に来ていた。高校一年生の男性も“ドーリ”でできた友達に会いに暇つぶしで来ていると答えた（11月13日高校1年生男性インタビュー）。“ドーリ”でできた友達はそれぞれ住んでいる地元が違う。そのため友達に会うには“ドーリ”を訪れるしかないのだ。

以上、共通で出てきたキーワードは「暇つぶし」であった。筆者が連絡先を交換した若者の中には毎日長時間インスタライブを行っている。他にもInstagramのストーリーでほぼ毎日DMか通話を選ばせるストーリーをあげている物もいる（写真3）。インタビューをした若者たちはたしかに時間を持て余している子が多かった。その暇を潰すことを目的に広場でたむろをすることもあれば、Instagramで友達と時間を共有することもある。



写真3 実際のストーリー

[4.2] なぜ“ドーリ”なのか

この節では札幌の街のなかには大通交流拠点地下広場のほかにもたくさんの広場があるなか、大通交流拠点地下広場を選ぶ理由について論じる。札幌市中心部には札幌市北3条広場（赤プラ）であったり、サッポロファクトリー煙突広場など、たむろすることができる広場はほかにもある。それなのになぜ若者は大通交流拠点地下広場を選ぶのか、この点をインタビューと行動観察をもとに考察する。そこには大きく分けて四つの理由があると推察する。

一つ目は、札幌市内外どこからでも訪れやすい立地であることである。前述の通りこの広場には札幌市内外各地から若者が訪れていたことがわかっている。そのため地下鉄南北線、東方線、東西線の全てが通っている大通駅内にあるためどこに住んでいても行きやすい広場となる。札幌市で地下鉄が通っていないのは清田区と手稲区のみで札幌市内からは地下鉄でのアクセスのしやすさがあるだろう。JRでも札幌駅で南北線に乗り換えて一駅のため札幌市街のJR利用者も集まりやすい。さらに大通駅構内ということで地下鉄から降りて一度も外に出ることなくたどり着くことができる。そのため天候を気にしなくて良いのも集まりやすい理由である。

二つ目は、集まった後にどこでも動きやすいということだ。インタビューを通してわかったのは若者は広場にたむろするが、常に広場にいるわけではない。11月14日にインタビューをしていた時も途中で2人がラーメンを食べに行き、残った2人はポールタウンの方へ歩き出した。広場に常にいるわけではないから集まった後のことを考えると街の中心である大通交流拠点地下広場に集まるのが都合がいいのだ。Sも「これからどこ行く？って言っ

て、札幌から札幌で集合してすすきのの方いくの遠いじゃん。で、すすきのの方に集合して札幌いって遠いじゃん。大通りに集合していくと、どっちも近いよ」と話す（11月28日Sインタビュー）。すすきの-大通-札幌駅の配置であるためどちらに行くにも行きやすいため、間である大通に集まることになる。

三つ目は、暇つぶしの場として最適である点である。ベンチがあるため座って滞在しやすい。広場は屋内であり冬は寒さを凌ぐことができる。交通局職員も気温が下がると地下に若者が降りてくると述べていた。広場はたくさんのベンチがある大通公園の真下にあるため大通公園にたむろしている若者たちが流れてきやすい。そしてお金を使わず長時間滞在することができるのも大きい。街で遊ぶとなればカラオケ、カフェ、ファストフード店など必ずお金がかかる。広場は改札に入る前のところにあるため入場料もかからず時間を気にすることなく滞在できる。実際、中学生は働くことはできないためお金がない。高校生もアルバイトはできるが、女子高校生がインタビューでお金がかからないから来やすいと述べていた。お金をあまり持っていない若者がお金をかけずに友達と過ごすことができるのが“ドーリ”なのだ。

四つ目は、「偶然を起こしやすい」ということだ。Sの行動観察を行った11月28日の最後に15分ほど広場に滞在していた。その15分間の間にS君は知り合い2名に偶然会い談笑していた。11月13日のインタビューの最中にもインタビューをしていた子の友人が通りかかりインタビューをさせてもらった。このようにたまたま知り合いと会いやすいのが“ドーリ”なのだ。札幌駅からススキノまでの間の地下歩行空間にこの広場ほど中心にある広場はない。札幌市民が通る地下歩行空間の交通量の多さを生かした偶然の出会いを起こしやすいため、若者がこの広場を選ぶ理由の一つだ。3章で若者の集まり方を述べたが、広場で集まる時は前々から約束していなかった。偶然広場であって遊ぶことも考えられる。“偶然”を半ば予期できる場所がこの“ドーリ”である。

[4.3] 若者にとっての“ドーリ”という通過儀礼

ここでは若者がいう“ドーリ”という広場は若者にとってどういった存在なのかを明らかにする。筆者が行った参与観察、インタビューを通して広場には中学生から高校生くらいまでの若者グループが多くいたことがわかっている。しかし大人たちは広場に4人以上で集まっている姿は見られなかった。また大学生くらいの者が広場で迷惑行為をしていたという報道もなく、交通局職員へのインタビューでも出てこなかった。つまり「たむろ」という使い方をするのは高校生くらいまでの若者だといえる。ただ若者といっても札幌市に住むすべての若者ではなく、前述したように広場に居場所を求める若者たちである。

しかしその若者たちもずっと広場にたむろし続けるわけではない。“ドーリ”にも世代交代があるのだ。Sも「多分さ、上に行けば行くほどさ、あれじゃない？卒業と一緒にじゃない？」
「3年くりになる。高1、高2、高3とか。大体18過ぎた頃にはみんないなくなっていくわけだから。」卒業して行ってまた新入生入ってきて、暴れて」と言うようにこの広場は新

しい世代が広場に行くようになっては、広場に行かなくなっていく世代がいる。Sも昔は広場で喧嘩し暴れていたが、最近はたむろ目的で広場に行くことは無くなっているという。その理由は、「ずっと暴れてたね。でもそれ（暴れること）がガキって気づいた頃にはもういなくなかった」と答え、自分で公共空間で暴れることはダサいと気づいたことで広場でたむろすることがなくなっていた。

だがなかには高校を卒業する年になっても広場にたむろしに来ている人者もいる。「そのなかにも、留年してるとか言ったりとか。19、20、たまにいるんだよね。留年してるなどか言って」とSもいうが、そういう人たちは広場にいる下の年代から「いじられる」。Sはそういった人たちのことを「なんでそんなまだ落ち着いてないの。その年だったら落ち着いてるでしょって」と思っていたと語った。自分たちの世代がいなくなり下の世代からもいじられるようになることで広場が居づらくなり、だんだんと離れていく。

広場を通じて多世代と交流し、迷惑行為、グループ同士での喧嘩をしたりもするがそれを経て、心身ともに成長し大人になっていくのだ。以上のことから“ドーリ”は訪れる若者にとっての「通過儀礼」になっていたと言える。

5章 結論

本研究では大通交流拠点地下広場の成り立ちから今現在の形になるまでの過程を明らかにし、若者、中高年の利用の実態、内情を記述し“ドーリ”が若者にとっていかなる居場所になっているのかを報告した。その結果、次のことが明らかとなった。

大通交流拠点地下広場では「居場所」を求める若者たちがそれぞれ集まり始めた。とりわけ居場所を求める若者たちというのは、各々“何かしらの悩み”を抱えその悩みの吐口として広場に「居場所」を求めていた。当初は広場を管理する主体の利用規制が弱かったためたまり場となっていた。しかし「ナタ事件」を受け駅構内ルールの掲示、警備員を配置したことにより利用規制が強まり若者が求める「居場所」ではなくなり、徐々に広場から姿を消した。

利用規制が強まる前の若者たちは広場で違う地元の若者と関わることにより自分の居場所を見つけ安心感を得て時間を過ごしていた。その中でも若者グループ内、グループ同士には<秩序>が存在した。そしてなぜ“ドーリ”に集まるのかも明らかにすることができた。それはアクセスのしやすさ、お金をあまり持っていない若者にとって暇つぶしの場所として最適であることなどが挙げられた。結果として“ドーリ”は訪れる若者にとって多様な他者と関わることができ、自分を大人にさせる“通過儀礼”の空間になっていた。

先行研究では若者たちが都市の広場に集まる理由、心情を説明した研究はあったが、都市の公共空間がどのように若者の居場所として機能しているかを明らかにした研究は少なかった。そこで広場に集まる若者を参与観察し、インタビューを行い行動観察を実施することで若者にとって広場がどのように居場所として機能しているかを明らかにした。ここに本研究の意義がある。

ただ本研究では都市の公共空間、つまり“ドーリ”に集まる「若者」にしかインタビュー、行動観察をすることができなかった。しかし“ドーリ”では「中高年」も居場所を求めて、広場に足繁く通っていた事実がある。このように広場で見受けられた中高年の「引退世代」が都市の公共空間にどのような「居場所」を求めているのかにも注目する必要があるだろう。中高年にもインタビュー、行動観察を行い若者目線だけではなく複数の視点で都市の公共空間について論じることが今後の課題である。

脚注

- 1) 一部の若者が大通交流拠点地下広場を呼ぶときに用いられる
- 2) ワンプレイ200円のパンチの強さを測れるゲームマシン
- 3) 写真や動画を通じて日常の瞬間をフォロワーにシェアし、大切な人や興味があることをより身近に感じることができるもの。
- 4) タイトーが運営するゲームセンター
- 5) 札幌駅南口にあるガラス張りのドーム上の建物。そのなかにベンチがあった。

参考文献

- 市川和子, 2009, 「水戸駅という若者の居場所」 『人文地理』 61(2):126-138.
- 石岡丈昇・岸政彦・丸山里美, 2016, 『質的社会調査の方法, 他者の合理性の理解社会学』 有斐閣ストゥディア.
- 萩原建次郎, 2022, 「都市における思春期年代の居場所と公園の意味—多世代共生の地域コミュニティ再生に向けて」 『ランドスケープ研究』 86(3): 226-229.
- 御旅屋達, 2012, 「子ども・若者をめぐる社会問題としての「居場所のなさ」—新聞記事における「居場所」言説の分析から—」 『年報社会学論集』 25:13-24.
- 小野良平, 2003, 『公園の誕生』 吉川弘文館.
- 坂西友秀, 1990, 「集団における人間行動の社会心理学的考察」 『埼玉大学紀要』 39(1), 1-17.
- 白幡洋三郎, 1995, 『近代都市公園の研究—欧化の系譜』 思文閣出版.
- 進士五十八, 2011, 『日比谷公園—110年の矜持』 鹿島出版社.
- 杉山和明, 1999, 「社会空間としての夜の盛り場—富山市「駅前」地区を事例として—」 『人文地理』 51(4):396-409.
- 住田正樹, 2003, 『子どもたちの「居場所」と対人的世界』 住田正樹・南博文
『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』 九州大学出版会, 3-17.
- 野尻裕子, 2004, 「昭和初期の児童公園に関する一考察—児童公園指導員の役割と健康観」 『川村学園女子大学研究紀要』 15(1): 169-78.
- 宮台真司, 1997, 『まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方』 朝日新聞社.
- 札幌市, 2024, 『令和5年度第17回定例市長記者会見記録』
<https://www.city.sapporo.jp/city/mayor/interview/text/2024/0226.html#s15>
- 札幌市, 2024, 『札幌の都市交通データブック』
- 札幌市, 2014, 『大通交流拠点地下広場整備基本計画』